○アジアエコノミックフォーラム・カンボジア

地球を西へ回る経済発展の流れが中国の次にたどり着くであろう、インドシナ半島。そのなかで近年、石油など地下資源が発見され、経済発展の機運が高まるカンボジア王国で開かれた第４回アジア・エコノミックフォーラムに参加した。冒頭で、ゲストのフン・セン首相が「金融危機が世界に波紋を広げているが、カンボジア経済は中国、ベトナムと密接な関係にあり、力強く発展している」と強調した。フォーラムでは、経済発展の目指す方向、発展を支える人材、エネルギー資源などに関して活発な意見が出された。

フォーラムは在福岡カンボジア王国名誉領事館の半田晴久名誉領事が総裁を務める世界開発協力機構が主催して１０月１３、１４、１５日の３日間、首都プノンペンのホテルで開催された。会場には、政府関係者や経済学者、学生ら約２００人が集まり、カンボジアを始め日本やアセアンのメンバー国、欧州など１２カ国から代表が、アジアの「挑戦」「可能性」「リーダーシップ」「将来」の４つをテーマに、英語でそれぞれ主張を述べた。

初日の夕刻に市内のレストランで歓迎レセプションがあり、タイ料理に似て香辛料を抑えた味のカンボジア料理をいただきながら、翌日から意見発表する各国のメンバーが顔合わせ。美味なる地元ビールなどアルコールの勢いも手伝って、発表者の間で早くも討論の前哨戦が繰り広げられる場面もあった。

フォーラム本番は、主催するカンボジア側から外務・国際協力省のカオ・キム・ホーン長官が、主催者として、カンボジア大学総長でもある半田名誉領事がフォーラムの趣旨を含めてそれぞれ挨拶。続いて、初日のゲストであるフン・セン首相は官僚の用意した祝辞を読み終えたあと、３０分間にわたり次のような趣旨の熱弁を振るった。

１、　米国発の世界金融危機について、東南アジアの株式が暴落（カンボジアには株式市場はない）したことは、米国―欧州と経済関係の深いカンボジアにとっても厳しい状況。米国には衣類や帽子などを年間３億ドル(約３００億円)も輸出している。これが売れなくなる心配がある。しかし、近い国、中国から経済面での影響を最も大きく受けている。中国にはこれまでも大変世話になっている。中国がしっかりしていてくれれば、インドもしっかりしており、アジアのなかでカンボジアへのダメージは少ない。

２、　（タイとの国境にあるプレスビヘア寺院を世界遺産に申請したことから、タイとの関係が悪化。３ヶ月前からカンボジア軍とタイ軍が国境線でにらみ合い、一触即発の緊迫した事態に進展している。１週間前にはタイの兵士が２人国境を越え、こんなことが次にあれば戦争になる、と

の非常事態に。翌日にはカンボジアの兵士２人が射殺されている。そんな）タイとの紛争について、寺院は国連の国際司法裁判所がカンボジア領土と裁定している。７月７日に軍を現地に送った。１週間前、タイ軍が越境してきた。証拠がある。もう一度越えてきたら戦争になる。現地に国防副大臣を責任者として派遣している。われわれは我慢してきた。戦争はしたくない。平和は大切だ。タイトの間はこれまでの友好な関係で、何の問題もない。ビジネス面でも。われわれは話し合いの席で解決していかねばならない。タイも同じ考えだ。しかし現場の兵士には、緊張が最高潮に達しているから止まらないこともある。ただし、わが軍は１mmたりともタイの領土に侵入してはいない。われわれはカンボジアの領土を守っているだけである。

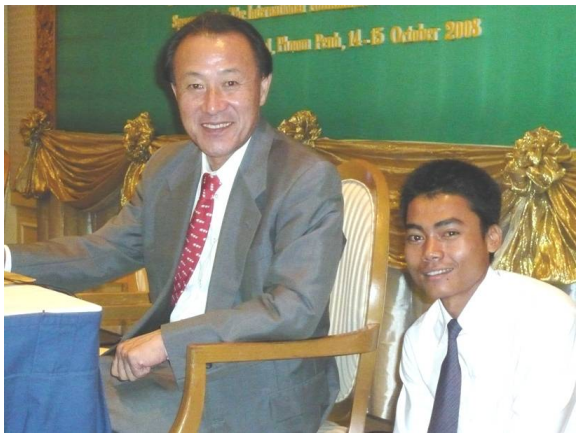
３、　総選挙を終えて首相就任について、今年あった選挙で１２３人の議席のうち野党は２，３人まで激減した。そして首相に選出された。任期は５年であり、次の総選挙で仮に議席を２０～３０減らしても、自分は、あと１０年は首相をやらなければならない。首相に就いてもう２３年間目。最初は３８人の首相候補と闘った。つぎは４人で闘った。いまは相手がいなくなった。(カンボジアにはシアヌーク王のラナリット家、ソシアット家という王家があるが、フン･センが新しい王家になったのではないか、との声も)。

今回のフォーラムで、半田名誉領事はアジアの経済振興に求められるのは人材育成であり、基本は教育であると強調した。特に、日本が戦後の経済復興を成し遂げたベースに教育があり、その教育力の原点に江戸時代の教育があったと紹介。当時の日本国民は武士だけでなく農民も教育を受けることができ、その場所は神社、寺院などで「寺子屋」と呼ばれていた。そこでは読むこと、書くこと、計算することが教えられた。「プラクティス、プラクティス。ラーニング、ラーニング」(勉強、勉強)と繰り返し、日本人の勉強振りを表現した。その教育の結果、国民の識字率は４４％に達しており当時、世界一のレベルだった。この江戸時代の教育を受けた人材が、明治維新から以後の西洋文明の取り入れ、発展を生んだ。明治維新からわずか４６年後に日露戦争があり、有色人種として初めて白人国家を破った歴史を語った。その結果、日本には当時の中国などアジア諸国から、孫文のような留学生が集まった。このように教育を重視した日本が、戦後の驚異的な経済発展に結実した。アジアはこの日本のすばらしい教育に学ぶべきである、と強調した。アジアの国に「戦争で迷惑をかけた」ことを理由に、日本が戦前にアジアで貢献した部分に触れない日本人が多い中で、半田名誉領事は「歴史的事実」として、公の席で日本の過去の「日本人の口から触れられていない」真実を話していた。また、半田名誉領事は自身のスピーチが終えたセクション以外の場面でも、最前列の席に陣取って他の発表者の発言を細かくメモする、主催者を越えた「勉強家」の姿を見せていた。フォーラム期間中に、カンボジア政府の要人との会合、テレビ取材、原稿執筆など「食事以外の自由時間のない」超ハードな奮闘ぶり。まさに超人的な活動を見せた。

日本人として２番目に発言したのは、ゴールドマン･サックス社に勤務経験のある世界開発協力機構の小山秀平副総裁が「世界金融危機とアジア経済の行方」について経済専門家の目で捉えたアジア経済を分りやすく解説した。特に今回の金融危機ではカンボジアに株式市場が未整備だったことが返って危機をまともに受けずに済んだ、被害が少なかったことはラッキーだったとし、市場が未整備でも未公開株の市場を導入することもできるので、今後の発展の可能性は大きいと語った。

ごとう県議は１５日の午後、「将来」をテーマにしたテーブルに。オーストリア在住インド人、ジェバマライ博士が議長で、４人目に登壇、マイクを握った。初めての英語でのスピーチで、どこまでできるか、などと考えるまでもなく、英語は冒頭の５分足らずの挨拶だけに絞った。というのも、日本を発つ直前、飛行機に乗るときにカンボジアから届いたテーマが「将来」だった。何の用意もできず、以前から半田名誉領事にペーパーで提案していた「カンボジア経済振興」についての考え方を簡単に絞って日本語で話した。通訳してくれたのは、カンボジア語はもちろん、日本語と英語ができるピセット君という青年だった。要点は「農民が８０％超のカンボジアは農業に経済振興の重心を置くべきであり、

農業振興をベースに将来を担う若者の教育を平行して進める」「メコンデルタという肥沃な大地を擁している利点。長く化学農薬、肥料に汚染されていない(残念ながら、先に化学農薬を使用してウンカを大発生させたといわれるベトナムから飛んでくるウンカの駆除のため１９９１年に日本からＯＤＡで化学農薬を持ち込んでいる)大地から生産された安全性の高い農産物を輸出品に育てる」「日本は食品の新鮮さ、美味しさに加え、安全性について非常に厳しい要求がある。これを満たすべき」「日本に対してコメを輸出することは難しい。不足している、日本人の食生活にとって欠かせない、例えば味噌汁、納豆、醤油などの原料である大豆や昼食の定番であるソバなど、海外依存型で国内生産できない、弱い品目を狙って生産すべき」「このような日本人の好み、不足している品目、弱点について情報を集めるべき」などと伝えた。これに対し、シンガポールの代表から「安全で美味しい農産物がインドネシアのボルネオ島で生産され、毎日、航空便でシンガポールに運び込まれている。これと同じようにアジアから日本に送ればいい」との意見が出された。



３日間のフォーラムが終了したあと、半田名誉領事、英国国教会トップを勤めた英国人夫妻とともにフン・セン首相に、昨年新築されたカンボジア国会議事堂に招かれた。この日、タイとの紛争で２人のカンボジア兵士が射殺された非常事態にもかかわらずフン・セン首相は３０分間も時間を割いた。この会見の中でもフン・セン首相は「カンボジアの経済の発展振り」「タイとの紛争は武力ではなく話し合いで平和的に解決する」と強調。家族の話になってからは「自身が恐妻家である」ことを笑顔で語るなど、余裕を見せて歓待してくれた。半田名誉領事からゴルフのドライバーをプレゼントされる。

○救急病院を見学

プノンペン滞在中、半田名誉領事が主宰する「ワールドメイト」という団体が米国の病院運営組織「ＨＯＰＥ」と連携して１９９６年に創設した「シアヌーク病院」を訪ねた。市街地にある一部３階建ての本館には、１階に救急患者を受け入れる「ＩＣＵ」(集中治療室)機能を有した部屋があった。ベッド数は２４床。２階には亜急性期の患者などが入院している。最上階には医学技術の向上のため、患者の家族から了解を得た死亡患者の遺体を解剖する部屋がある。本館以外の３～４階の建物も半田名誉領事のワールドメイトからの支援で建設されていた。研究、研修棟には国内から研修に来る医師や看護士らの部屋が設けられている。情報化も進んでおり、テレメディスンで国内、米国の病院と結ばれ、最新情報がやり取りされているという。

入院を希望する患者は毎朝７時３０分から８時までに、病院玄関に家族とともに並ぶ。連日１００人近くが並ぶらしいが、その中から医師らが重症の度合いを診て重い症状の患者を優先して入院させているという。救急車も常備されており、事故などの患者も受け入れている。患者の半数はプノンペン以外の田舎からやってきている。救急車も常時配備されており、事故などで運ばれてくる患者もいる。また、ＨＩＶ、結核などの感染性の病人は優先して受け入れているようだ。創設以来１２年間の患者数は延べ約９１万３千人に達している。

病院を案内してくれたのは台湾籍の中国人スタッフ。夫も病院の経営メンバーとして働いている。彼らは２,３年で母国に帰るという。医師や看護士ら人材もそうだが、病院を運営していくには、年間数億円の費用が必要。今後とも海外からの経済的、人的バックアップが欠かせないようだ。因みに不足していることはまだあった。見学中に短い時間だったが停電した。一瞬にして暗くなった病室。手術中だったらどうなっただろう。エネルギーの安定供給絶対だ。

シアヌーク病院を見学する前日早朝、散歩の途中で宿泊したホテル裏にあったタンクボパー小児病院の前を通った。朝早く６時半ごろなのに、なぜか人通りが多い。飲食の露天が並び、子供向けのおもちゃ、赤ちゃんをあやす飾りや鳴り物が売られている。バイクのタクシーが５，６０台も待機していた。驚いたのは、病院の玄関に受付テーブルが置かれており、その前に赤ちゃんを抱き、幼児の手を引いた親が長蛇の列を成していた。

幅２～３ｍの歩道に並んでいた親の数を自分の目で確かめたら４００人を超えた。並んでいない親子のなかには路上の露天で焼きそばのような麺、串刺しにしたバナナなどを食べている者もいた。奇妙だったのは関係者を含め千人近くが集まっていたのに静か。＊＊行列ではみんな無言。誰一人しゃべる者はいなかった。列の前後でわが子の病気について語り合うのが当たり前ではないかと思うが、通りかかる自動車やバイクのクラクションくらいしか聞こえてこない。何故みんな黙っていたのか。並んだことのある通訳氏が「しゃべると順番からはずされる。ポルポト時代に規則を守らないと殺された場面を知る人たちは決して命令には逆らわない」と言った。７時過ぎ、警備員が携帯の拡声器で何かしゃべり始めたところ、３００人以上の列が壊れていった。このときも誰一人文句を言う、悔しそうな声をあげる者もいなかった。後遺症は大きく、深い。

〇カンボジア大学見学

滞在中、半田晴久名誉領事が総長をしているカンボジア大学を訪問した。大学は市内の独立記念塔のそばにある２階建ての本館と別館でできている。